

らざるなりと謂ひて、筥に入れて蔵し、山の石の中に置く。七日を逕て往きて見れば、肉団の殻開けて女子を生む。父母取りて更に乳を哺ませて養ふ。見聞く人、国合りて奇びずといふこと無し。八箇月を経て俄ならずして長大。頭と頸と成り合ひ、人に異なりて頤無し。身の長三尺五寸、生れながら知りて口利く、自然づから聡明し。七歳以前に、法華と八十花嚴とを転読み、熟然にして返らず。終に出家せむことを樂ひ、頭髮を剃除り袈裟を着て、善を修ひて人を化ふ。人の信はずといふこと無し。其の音多く出でて、聞く人爲に哀ぶ。其の体人に異なり、閨無く嫁ぐこと無し。ただし尿を出す寶のみに有り。愚なる俗皆りて、号けて猴聖と曰ふ。時に託磨郡の国分寺の僧とまた豊前国宇佐郡の矢羽田の大神寺の僧と二人、彼の尼を嫌みて言はく「汝は是れ外道なり」といひて、嘲し咈りて鬪る。神人空より降り、杵を以ちて僧を棠かむとす。僧恐り叫びて終に死ぬ。大安寺の僧戒明大徳、彼の竺紫國府の大神師に任せられたる時に、宝龜七八箇年の比頃に、肥前国佐賀郡の大領正七位上佐賀君の兄公、安居会を設け、戒明法師を請へ、八十花嚴を講かしめたる時に、彼の尼闕けず衆の中に坐て聴く。講師見て呵嘖みて言はく「何の尼か濫しく交る」といふ。尼答へて言はく「仏は平等の大悲の故に、

一切の衆生の爲に正しき教を流布く。何故ぞ別に我れを制むる」といふ。因りて偈を挙げて問へば、講師偈を通ること得ず。諸の名高き智しき者、怪びて一向に問ひ試れば、尼終に屈かれず。すなはち聖の化なりと知りて、更に名を立て、舍利菩薩と号し、道俗婦り敬ひて化主とす。昔仏世に在りし時に、舎衛城の須達長者の女蘇曼の生める卵十枚、開けて十の男と成り、出家してみな羅漢果を得たり。迦毘羅衛城の長者の妻、懷妊みて一の肉団を生み、七日の頭に到りて、肉団開敷けて、百の童子有り。一時に出家し、百人俱に阿羅漢果を得たり。我が聖朝に弾き庄さるる土に、是の善き類有り。斯れまた奇異しき事なり。

法花經を写し奉る女人の過失を誹りて現に口喎斜む
縁 第二十

粟国名方郡埴村に、一の女人在り。忌部首なり字は多夜須子と曰ふ。白壁天皇の代に、是の女法花經を麻殖郡の苑山寺に写し奉る。時に麻殖郡の人忌部連板屋、彼の女人の過失を挙擧して誹謗るが故に、すなはち口喎斜み、面後

「なりあひ」という語を古本説話集・下・五十三は「なりみちにけり」と説明している。
一上巻四縁。二妙法蓮華經・提婆達多品には八歳の龍女の成仏が説かれている。
三唐の実叉難陀の訳の大方広華嚴經。八十卷。則天武后による序の存在や、法華寺の華嚴会（三寶給・僧十三）など、女にかかわる。
六上巻十八縁。七明記されてはいないが、自度か。八中巻四十一縁。九外尿道口。
一女子の容貌を猴に見立てていうか。
二熊本市出水、神水本町。
三分県宇佐市南宇佐。
四仏教徒以外の者。仏教徒の立場でいう語。罵言。五からかう。
云讃岐国の人、俗姓は凡直氏、出家して大安寺に住み慶俊を師とする。華嚴經を学び奥旨を究める（日本高僧伝要文抄・三所引延暦僧録）。
「日本古代人名辞典」は同一人とするが、唯識論卷二同学鈔・五にみえる「薬師寺戒明和尚」七七九年に渡唐し七八一年に帰国かは別人であろう。一七本説話の当時には筑紫国は筑前国と筑後国とに分かれていた。国府は福岡県太宰府市（筑前国）、久留米市合川町（筑後国）に所在。二彼竺紫國府が何をさすのか不明。大宰府を意味するか。
八「国師」は国分寺の主僧。七〇二年より国ごとに置かれた（統紀）。七七〇年より増員をみたため、七八三年には、大國と上國には、大國師一人、少國師一人を置くようになった（統紀）。本説話のころの「大國師」とくに「一國府の大國師」とは何か、不明である。
元宝龜七年は七七六年。日本高僧伝要文抄所引延暦僧録によれば、戒明は、七七八年には在

唐、七七九年にはすでに帰国。七七七年に渡唐し七七九年に帰国か。本説話の「宝龜七八箇年比頃」は、上文の「七歳以前」にも合致し、戒明の伝記とも矛盾しない。
一佐賀県佐賀市、佐賀郡あたり。
二未詳。本説話以外に所伝をみない。
三上巻十一縁夏安居。七四九年より七九四年まで毎年、国分寺では大國師と小國師とらよつて安居に妙法蓮華經と金光明經とが講ぜられた（東大寺要録・八所引安居縁起、貞觀交替式。華嚴經と安居との関係は不明）。
三中巻一縁に、「沙弥は「衆僧」に含まれない」と解せられる記述があつた。本説話では、女子の容貌や体形に關しての言か、自度であることに關しての言か、不明。
四一切諸仏、皆悉具三足、平等大悲、恒不捨離、一切衆生二大方広仏華嚴經・仏不思議法品。五どのような偈をあげたのか、不明。
云上文にみえた「猴聖」のサルと、この「舍利菩薩」のシャリとは、音が近い。
毛賢愚經・十三・五十八。六撰集百縁經・七・六十八。元九州をさす。

第二十縁 今昔物語集・十四ノ二十七に書承。法華經は女の救済にかかわる經典とされた。三上巻十九縁。

三德島県名西郡石井町あたり。一「粟国」は阿波国。三未詳。本説話以外に所伝をみない。

四德島県麻殖郡あたり。五未詳。

云未詳。本説話以外に所伝をみない。麻殖郡には忌部郷がある（和名抄）。毛板屋が女のような過失を誹謗したのが叙述されていない。叙述がいささか抽象的である。書写における文字の誤脱を「過失」としたか。

に戻りて、終に直らず。法花経に云はく「此の経を受持つ者を誘らば、諸の根聞く鈍く、姓にして陋く、攀躓盲聾背偏にならむ」とのたまふ。また云はく「是の経を受持つ者を見て其の過惡を出さば、もしは実にもあれもしは実にあらざるにもあれ、此の人は現世に白癩の病を得む」とのたまふは、斯れを謂ふなり。當に慎むべし、信ふ心もちて、彼の徳を讃むべし。其の缺を誇られ。大なる災を蒙るが故に。

沙門眼盲ひたるに因りて金剛般若経を讀ましめて眼を

明くること得る縁 第二十一

沙門長義は、諸衆の右京の薬師寺の僧なり。宝龜三年の間に、長義の眼目闇く盲ひたり。五月ばかりを逕て日夜恥ぢ悲び、衆の僧を屈請へ、三日三夜に金剛般若経を誦誦ましむ。すなはち目開明きて本の如く平ゆ。般若の驗の力其れ大に高きかな。深く信ひ願を發せ。願ひて応へずといふこと無きが故に。

重き斤をもちて人の物を取りまた法花経を写して現に善と惡との報を得る縁 第二十二

他田舎人蝦夷は、信濃国小県郡跡目里の人なり。多く財宝富にして、錢と稻とを出挙す。蝦夷法花経を二遍写し奉る。遍ごとに会を設け、講誦むこと既にする。後にまた思ひ議りて、なほ心に足らず。更に敬ひて繕写し、ただいままだ供養せず。宝龜四年癸丑の夏四月の下旬に、蝦夷忽率に死ぬ。妻子量りて言はく「丙年の人なるが故に焼失はず」といふ。地を点めて墓を作り、殯して置く。死にて七日を経て、甦りて告げて言はく「使四人有り。共に副ひ將て往く。初に広き野に往き、次に卒しき坂有り、坂の上に登りて大なる観有るを觀る。是に峙ちて前の路を視れば、数の人多有りて箒をもちて路を掃きて言はく「法花経を写し奉りし人、此の路より往く。故に我れ掃き浄めむ」といふ。すなはち至れば待ちて礼む。前に深き河有り。広一町ばかりなり。其の河に椅を度せり。数の人衆有りて、其の椅を修理ひて言はく「法花経を写し奉りし人、此の椅より度る。故に我れ修理はむ」といふ。到ればすなは

一 妙法蓮華經・譬喻品。取意。
二 妙法蓮華經・普賢菩薩勸發品。

第二十一縁 今昔物語集・十四ノ三十三に書承。

三 金剛般若波羅蜜經に、仏が須菩提に対して、如來には肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼があるか、と問ひ、須菩提はすべてに有りと答えたことがみえる。この經文と本説話の展開とに対応關係がある。

四 未詳。本説話以外に所伝をみない。景戒の知友といえようか。

五 七七二年。
六 金剛般若經集驗記所収説話には「力」の語を含む表現を有するものが少なくない。「豈非般若力乎」(救護篇)、「信知般若之力不可思議」(神力篇)など。本書でも中巻二十四縁に「被般若力」とあった。

第二十二縁 善業と惡業についての現報説話

七 未詳。本説話以外に所伝をみない。万葉集・二十・四〇にみえる国造小県郡他田舎人大島は同族であろう。

八 長野県小県郡、上田市あたり。

九 下巻八縁。

一〇 七七年。

二 このような信仰の存在は不明。本書では、死骸が火葬されずに保存されたことの理由が記述される説話が多い。遺言(中巻五縁、七縁)、死後の託言(中巻十六縁)、天皇の命令(上巻五縁)、裁判のため(下巻二十三縁)などであるが、中国説話の世界に広くみられる、体がまだ温か

かったので葬らなかつた(たとえば広記・三八二・程道惠「心下尚暖、家不殯殮」)という理由のものはみえない。

三 墳墓をつくって葬った。底本訓釈(墓)皮比也平。「殯」を、諸注は「もがり」と訓み、「葬」の前段階のように解するが、疑わしい。賊盜律、およびその疏では、「殯」はその次の段階に「葬」を予想してはいない。墳墓をつくりその中に収める、というかたちで葬ることを「殯」というのであろう。

四 冥界で、はじめに野があり次に坂を登る例に、法苑珠林・破戒篇・感應緣所引冥祥記・智達「四望極目、但觀一荒野、途徑艱危、示レ道登臨」がある。

五 冥界で、坂を登る例に、法苑珠林・六度篇・懺悔部・感應緣所引冥祥記・慧達「行路転高、同・六度篇・精進部・感應緣所引冥祥記・僧規行至一山」がある。

六 石長和の説話(たとえば法苑珠林・六度篇・地獄部・感應緣所引冥祥記)には、冥界の道を進む石長和の前を五十歩はなれて二人の「治道」(道路を修理する者)が進み長和ひとり「平道」を行く、という記述がある。

七 法苑珠林所引冥祥記・石長和に「仏子独行大道中」、同・破邪篇所引冥祥記・程道惠に「仏弟子行路、修福人也」とみえる。いずれも平坦な道を進んでいる。

八 原文「即至」。至ると同時に、の意。

九 一町は一〇六・四、河幅が一町。そこにかかる橋は当然ながらそれより長い。広い河にかかる長い橋。異様なイメージである。

一〇 冥府に至る途次に「橋」を渡る例に、西陽雜俎・二・遊業、金剛般若經集驗記・神力篇・僧清虛・万歲通天元十年十月二十三日条、などがある。